

鈴木有郷牧師説教

3/7/10 イエスは良い羊飼 い ヨハネ10:11-15

ヨハネによる福音書は、主イエスは、「わたしは良い羊飼 いである」と言われたと記しています。「良い羊飼 いは羊のために命を捨てる。」つまり、主イエスは、ご自分を、羊の群れを襲い、追い散らし、殺そうとする狼から守る羊飼 いだ、と言われたのです。

狼とは何でしょうか。狼とは人間の尊厳を否定し、搾取と抑圧の対象とする支配の仕組みとその責任者を指しています。この主イエスの主張はまことにラディカルな性格を持っていました。

何故なら、武力と経済力と権力を一手に納めた情け深い王様のダビデやソロモンも、主イエスの基準に照らしてみれば、狼に他ならないということになるからです。

彼らもまた究極的には抑圧の仕組みの最高責任者であることに変わりはありません。

また主イエスは、羊飼 いとしてのご自分を、狼を前にして逃げ去る雇い人と対比してもおられます。「羊が自分のものでない雇い人は、狼を見ると羊を見捨てて逃げ去る。」

主イエスの時代における狼が、イスラエルを植民地にしていたローマ帝国だったとすれば、雇い人とはローマにこびを売っていた傀儡の王ヘロデであり、ローマ帝国と調和を図るためにユダヤ教の神学的主張を薄めていた宗教指導者達でした。

主イエスは、搾取と抑圧の犠牲になっている民のために、狼と雇い人の前に「良い羊飼 い」として大手を広げて立ちはだかったのです。「わたしは羊のために命を捨てるのである。」と言われたのはその意味です。

抑圧の仕組みの手先である雇い人にとって、羊、つまり一人一人の人間は、モノでしかありません。しかし羊飼 いは羊一匹一匹を「知っている」のです。「わたしは羊を知り、わたしの羊はまたわたしを知っている。」

この「知っている」という言葉は重要な意味を持っています。知っているというのは、顔は見たことがあるとか、名前は聞いたことがあるというような表面的なことではありません。聖書において「知っている」とは、神と人、親と子、夫と妻、友と友等の間に見られる、深い愛の絆で結ばれている人格関係を指しています。

「わたしは羊を知っている」というのは、主イエスは私達一人一人を、かけがいのない、宇宙で唯一の、限りなく貴重で、限りなく重い一個の人格的存在として心にかけておられるという意味です。

だからこそ、私達はいかなる困難な状況の中にも、人間らしく、正々堂々と生きていくことができるのです。

ですから、「わたしは良い羊飼 い」という言葉は、2000年後の現在においても、決して褪せることはないのです。

私達が、拝金主義や自己中心主義や民族差別や人種差別といった現代の狼を前にして、勇気をもって、良心的に、正直に、自分の善だけでなく、他者の善に貢献しながら、人間らしく正々堂々と生き抜くことができるのは、他でもない、自分は、この自分のために命を捨てることも辞さない主イエスの愛の眼差しの下にいるからです。

今日は聖餐式の日曜日です。あなたの横に跪いている人と、そして世界中の教会で礼拝しているすべての人々と、私達は堅い絆で結ばれているのです。彼らと共に私達は「わたしは良い羊飼 い」という主イエスの言葉に信頼し、希望を託して生きているのです。

これは考えてみれば、私達の心を揺り動かさずにはおかない素晴らしい恵みではないでしょうか。その恵みを心に刻み付けながら、一日一日をしっかりと生きていこうではありませんか。